

黄金とシルク=ロード ——歴史研究と言葉——

伊 東 隆 夫

民族によって多少の差は見られるが、黄金は太古から人間の渴望的であったと言えよう。15～16世紀のいわゆる大航海時代の開幕に、黄金郷(E1 Dorado)伝説が動機の1つになっていたことは明白であり、時代をさかのぼって文献をひもとけば、『旧約聖書』ではイスラエル王ソロモンの許に、黄金の国オフィル(Ophir)から黄金運搬の船団が派遣されたこと(列王：上、9～28, 10～11, 歴代：下、8～18, 9～10, 13)が記され、『新約聖書』では、キリスト降誕後、東方の3人の王が礼拝に来た献げ物の中に、黄金があったことが述べられている。また、仏典の中にも Suvarna-dvīpa(金の島、金洲)、Suvarna-bhūmi(金地国)が、アジアの南海地域に存在していたことが記されている。

眼をギリシアに転じると、ヘロドトスの著『歴史』(巻3)には、南ロシア地域の草原に進出したスキタイ族が盛んに行なった交易品の中に、毛皮と並んで金を注目させ、今や数多くの発掘品を誇るエルミタージュ美術館蔵のスキタイ文様をもった黄金飾板類は、その例証を提供している。ヘロドトスは、産金地を明確にはしていないが、中国史料で「金山」の表記は、アルタイ山脈に比定され、また8世紀の突厥碑文に見える Altun yish の意識が、「金山」であることも知られ、同地域が、古来遊牧民の根拠地であったことと、金の動きとが関連づけられる。6世紀半ば頃西突厥と東ローマとの攻守同盟の成立を述べた後者の史家メナンドロスの記述によれば、天山山脈中部におかれた突厥王の牙営に、黄金製品が豊富であったとしている点も注目に値すると思う。

8世紀になり、それまでトルコの支配下にあった中央アジアは、イスラム勢力の東進に直面し、従前の遊牧民の進出ルートも、その勢力下に置かれ、タラスの戦(751年)や安史の乱(755～63)を契機とする唐の西域経営の弱体化とあいまって、シルク=ロード時代は終幕を告げた。それに代って開かれた“海のシルク=ロード”と呼ばれた海上ルートについて、黄金の問題だけに限定して紹介を試みたい。

既述した『旧約聖書』の産金国オフィルはさておき、西紀後1世紀のローマのポムポニウス=メラや、ブリニウス、同世紀中葉頃の『エリュトラ海案内記』に見えるガンジス付近の“人の住む世界の東に向いた昇る朝日の下に位置する”クリュセー(Chrysē=黄金[島]の意)のことや、2世紀中葉に

プトレマイオスのいうガンジスの彼方の銀の国 (Argyre)・金の国 (Chrysē) さらにジャヴァ (Iabadios) の多量の金の産出の記事は注目すべきであろう。他方、時代をくだり、“砂漠の民”から“海洋の民”に変身し、『千一夜物語』に“船乗りシンドバッド”の物語を残しているアラビア人は、9世紀中葉以降多くの地理学者を輩出したが、彼らの著作中に“シナの彼方、シラ (Sila, 新羅?) の遙か向う (の島) に金の豊富なワークワーク (Wakwāk) 国があること、さらにその国には、東と南の2国があるとする記述もある (これは当時のアラビアの地図が、メッカを中心に円盤状に描かれ、インドから東に伸びる海岸線と、当時は未知であったアフリカの海岸線が、地図上の東端で接近するようにされていたからでもある)。以上により、世界の東方に黄金国ありとの伝承は、太古から西方諸民族の間でかなり根強く、様々の形式や内容で語り伝え、書き継がれたことが知れよう。

ここで舞台を東アジアに移すと、漢民族は玉や裘を重視したようであるが、朝鮮には金冠等の出土品が多く、『日本書紀』では、新羅から金姓の国使の来朝が記され、さらに『万葉集』(巻18)にも歌われた陸奥の国の産金を言上したのが、陸奥守百済の敬福であったことなどの史実が思い起こされる。遣唐使とともに中国に派遣された留学生たちに、朝廷から黄金 (砂金) を下賜されていたことも、『続日本紀』などから知られる。ひいて唐都長安で接した日本人の殆んど總てが金を携帯していたとすれば、Marco Polo の『東方見聞録』の日本の金産出の記載へと発展していったとの推論も可能となろう。筆者は、その昔アラビア人の Wakwāk 国の伝承 (女王の統治、同国人の遠征航海や、明治の王圻撰『三才図会』に見える大食国 (アラビア) の人面木 (人が近づくとワク・ワクと笑う [またワクワクの叫び声をあげて落果する] 実を生じる木) のことなどについて、出来る限り詳細に分析し、その国名が「倭国」の称と混同されて行った可能性について拙論を草したことがあり、またコロンブスが探検航海出発前に愛読したラテン語訳初刊本 (1484? アントワープ刊) 『東方見聞録』へのコロンブスの書き入れの詳細について、恩師杉本直治郎先生と共著で、私見を公けにしたことなどを紹介しながら、歴史研究上言語学的知見の必要性について略述を試みた。